

兵庫県産日本酒と酒米のさらなる輸出活性化を目指す



日本酒の原料である酒米。その王者と言われる山田錦のルーツ・兵庫県において、山田錦と日本酒のさらなる海外発信を目指した酒類輸出セミナーが2月15日に開催された（主催：ジェットロ神戸、協賛：ほんまもん山田錦需要拡大協議会）。世界の酒類ビジネスの有識者に話を聞ける機会ということで、神戸市のホテルに酒造会社などから約120人の参加者が集まった。



“酒米の王者”兵庫県産山田錦が日本酒ブランドの傘になる



法政大学 経営学部 教授 木村 純子 氏

まずは法政大学教授の木村純子氏による「日本酒の海外輸出拡大にどう活かすか～兵庫県産「山田錦」という地域ブランド～」と題した基調講演が行われた。日本食ブームを背景に日本酒の輸出が伸びるなか、木村氏は2017年12月の日EU経済連携協定(EPA)の交渉妥結が追い風になると指摘。EU関税や輸入規制の撤廃、さらにはGI(地理的表示)「日本酒」の保護によって日本酒と他国製造の清酒がEU内で差

別化され、約5億人の市場に日本酒の品質の高さがアピールできるとした。

さらに大吟醸や吟醸酒の酒米として欠かせない兵庫県産山田錦が、独特な地理的条件のもと、江戸時代から村米制度という地域のつながりで生産されている特性を紹介し、明確なテロワールを持っていることを提示。それが世界市場で高い競争優位性を持つことを示し、産品特性と原産地特性を結びつけたブランディングを提案した。その上で、消費者を惹きつける日本酒の傘の役割を担うブランドになれるのは兵庫県産山田錦だとし、個別ブランドとの協働マーケティングにより、日本酒と兵庫県産山田錦の相互の価値を高める可能性にも言及。将来の「兵庫県産山田錦」のGI登録を含めた期待の高さを明らかにした。



パネルディスカッション

ブランド・地域・酒米をラベル表記し市場に合ったアピールを



世界市場の最先端にいる酒類ビジネスのエキスパートを招き、兵庫県産山田錦の認知向上と兵庫県産日本酒の輸出促進をテーマとしたパネルディスカッションが行われた。パネリストは、香港を拠点とするエリオット・フェイバー氏、アメリカの酒類ディストリビューター、チャールズ・マグラス氏、イタリアで日本酒の輸入販売を手がけるファビオ・カルタジローネ氏の3人と、兵庫県立農林水産技術総合センターの杉本琢真氏。

今回の来日の際には3人は兵庫県内の酒蔵を巡り、日本酒を堪能した。ソムリエでもあるフェイバー氏は「私にとって兵庫県産山田錦は、赤ワインぶどう品種の王様、カベルネ・ソーヴィニヨンのようだ」と語った。それゆえに「兵庫県産山田錦をひとつのロゴとしてラベルに表記し、明確にアピールすべきだ」と3人から提案があった。

アピールポイントについては、研究者の杉本氏から説明があり、「兵庫県の気象、土壌、地形などの条件が相まって大粒の高品質な山田錦が収穫できている。日本酒の豊かな味わいを生み、高度に精米しても壊れにくいため安定した酒造りが可能。しかも山田錦の種子は兵庫県にしかなく、その管理を支える組織として兵庫県酒米振興会やJAグループ兵庫があり、行政が研究・普及を担うなど各機関の連携があるのも強みだ」と語った。

アピール方法としては、表ラベルにブランド、地域、酒米を明記し、消費者にわかりやすく伝えることが不可欠だと3人から指摘があった。さらにカルタジローネ氏が「イタリアでは漢字に象徴されるように、日本文化が具現化されていることが重要」と語る一方、フェイバー氏は「漢字が読める消費者が多い香港では、デザインのバランスが肝心」と言うなど、市場特性に合ったデザイン表現の必要性も明らかになった。裏ラベルについては、マグラス氏から「アメリカでは英語表記が必須。詳細情報はバーコードからWebサイトに誘導してはどうか」と具体的な提案もあり、日本酒の輸出拡大を目指す参加者は熱心に耳を傾けていた。

パネリスト

Elliot James Faber 氏
Beverage Director,
Hong Kong Yardbird Group

Charles McGrath 氏
Wine and Sake Sales Executive,
Mexcor International Wine and Spirits

Fabio Caltagirone 氏
Founder/Commercial,
Milano Sake

杉本 琢真 氏
兵庫県立農林水産技術総合センター
主任研究員

モデレーター／渡邊 大
ジェットロ新輸出大国コンソーシアム事業
エキスパート